

## 京の義仲：小説

著者	山崎，？
雑誌名	龍南
巻	2 1 1
ページ	1 2 8 - 1 3 9
発行年	1929-12-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6910">http://hdl.handle.net/2298/6910</a>

## 京の義仲

山 崎 清

壽永二年七月二十六日木曾義仲は、北國五萬餘騎の荒武者を率いて後白河法皇を守護し奉り、美はしい京の山河に迎へられて華々しく都入をした。同じき日伏見から十郎藏人源行家の手勢や、大江山を経て來た矢田の判官代源義清や、攝津の國河内の源氏等が續々と上洛して來た。

京の人達には二十餘年來京には見受けられなかつた源氏の白旗が眞に物珍しくあつた。

同二十八日特に義仲と行家は法皇の院の御所に召された。

義仲は餘りにも事急なのに驚いた。「叡山の延曆寺で兵陣に法皇の御幸を辱なくしたからには、何か御沙汰が有るだらうとの期待は既に持つて居た。

然し連日の戦と大軍統率の疲勞と氣苦勞の身体を休め、然も未だ京洛の雰圍氣を充分に呼吸する暇さへ無く、此んな矢次早に御召に與るとは、些か以外の感がしないでもなかつた。のみならず木曾の深山で、全く自然を相手に放縱な生活のみに馴れて來た自分に、規則と禮儀に縛られた、都の窮屈な生活の中へ直ぐ飛び込めと云はれるのは、少なからざる當惑を感ずる。自分は複雑な御所の禮儀作法は全然無知だ。

今迄は全く無遠慮と威壓の下に、一切を盲從せしめて來た田人義仲は、都會人としての振舞と教養を、要求されるに耐えなかつたのだ。

彼し、彼は思つた。

「義仲程の者だ、此の様に些細な事に心を奪はれ、氣後れする様では。信濃を出て俱利伽羅峠以來の連捷の生々しい記憶は、鐵

の様な俺の強い意志と、固い信念を裏書きするので無くて何であらう。

而かも今迄自分の總てを保證して呉れた剛健な體軀は何んと堂々たるものでは無いか。又忠良な郎從達は、自分の後立てとしては、何んと立派なものだらう。

何に大丈夫だ。俺の爲す事に何の間違ひも有らう筈がない。實に彼の自信は絶對なものだつた。

その日、義仲は赤地の錦の直垂に、塗籠の箭を負ひ、時劍を佩び、折烏帽子に黒革絨の甲冑を着し、笠符さしを左右の袖に付けた威風堂々天晴れ一軍の大將の立出であつた。尙彼氣入りの筋骨逞しき大兵の郎從五人、童一人に同じく甲冑を着けて、物々しい仕度で院の御所に向つた。

優しい京の町では、彼等の姿は凄じくもあつた。然し之は彼等が爲し得る最善の仕度であり、又義仲の絶對的自信より出た事は、他言を要しない。

豪壯な建物に入つた義仲は、最初から既に、何か大きい物で掩はれる様な壓迫を感じた。同時に彼の力に對する自信は何んとなく動搖し始めた。それから生じた色々の懸念の交錯は、云ひ難い不安に彼を滿した。生れて始めて味つた此の種の壓迫感!!

だが義仲はどぎまぎする心持を出来るだけ抑へて、顔に出さない様に努めた。

案内の有司の京の言葉が、和やかな抑揚を爲して、義仲の耳に、朦朧として響いた。加之御廻廊で行きかふ人達は、大兵な郎從の髭武者揃ひで、物々しく甲冑を着けた様や、ぎこちない身ごなしを異様な眼でじろくくと見るのであつた。義仲はその注視を厭く思つた。

「小人共奴が、」と彼は心の内で呟いた。

有司等の衣服と、義仲等の束装は眞に面白い對照だつた。

案内を受けて、義仲は庭の南に當つて、御所の方に向つて郎從達とは遙か離れて跪いて、畏つて居た。程なく行家が案内されて來た。

行家は義仲を見るや、憤しやかな目禮をした。義仲は彼自身の有する優越感を明らかに表示する輕い蔑侮の眼を以て之に答へた。然し彼のこの行家を壓倒せんとした氣分は、その根柢に動搖を來たしてた事は、明かである。何故なれば彼自身が既にこの無意味な努力に焦慮し微妙な不安の中に束縛せられてしまつて居たからだ。加ふるに、彼自身の服裝が、餘りにも周圍の雰圍氣に不均整な、矛盾して感ぜられる事は、純朴な唯一條<sup>すじ</sup>の彼の心には重大な事に思はれた。

行家は縫物の紺の直垂に同じく縫物の紺の毛の鎧、引立烏帽子の輕裝である。義仲は行家までが、自分の微かな期待を、何か裏切つて居る様な氣がした。だがこの場合彼が、強いての威嚴を取り繕ふ程の落ち着き、は持ち合せて居た。

聽て、法皇が御簾の内に臨御遊ばされた。最も崇高の極みだつた。そして公卿達の起居動作の有様は、義仲には茫然として眞に優美な一幅の繪卷物であつた。

檢非違使の別當左衛門督實家と頭辨兼光の兩人は院の殿上の簀子に恭々しく蹲踞して、

『御兩人砌下に御進み下さる様』と兩人を召した。

行家は、臆する所なく砌迄進み出た。

義仲は、自分の不調和な束裝や御前で之れ以上の醜態曝露は反つて恐れ多いと思つた。尙深く敬つて敢へて進まうとはしなかつた。

御簾の内から法皇は凜呼たる御聲で平家内大臣以下一族皆追討すべき院宣を賜はつた。義仲は腹の底まで透き徹る様に思はれた。義仲は雷霆に打たれた様に唯専ら平服し戦く聲で感激の内に院宣の御返事を申し上げた。尙兩人は宿所までも賜つた。義仲の振舞は人爲的技巧と摸倣を超越した朴そのものゝ美しさが有つた。

それにしても義仲、行家兩人の作法の異なる様は眞にすさまじい限りだつた。

義仲は、御所を退出した。全神經の緊張から弛緩への轉換は精神に非常な疲勞を覺えしめた。

賜はつた大膳大夫忠成の六條西の洞院の宿は萋々と夏草が生ひ茂つて居た。築山、池、掛橋等の自然の容姿の中に唯滿目の夏

が、滴る緑の中に展開され、躍動して居つた。野趣に富んだ清閑な所だ。

義仲は此處に落ち着いた。

『此れで自分の法皇に對する信任も増し、従つて社會的地位も確固に成つて來たのだ。今迄の自分の幼少からの木曾での努力は幾分報いられた。』斯くして彼の霸氣は一段の進展と満足を覺えた。義仲は無上に有難かつた。

## 二

燭臺の油が緩く燃えてゆくにつれ、一座の酒杯の數は次第に重ねられた。

『今宵は無禮講ぢや。心置なく呑め』義仲は云つた。『京入りの祝ひの酒宴ぢや。』

彼は赭顔の逞しい北國の侍共の鄙の舞ひに打ち興じつゝ、左右には信濃から引具して來た巴、山吹の兩美女に侍られて、山海の珍味に舌鼓を打ちつゝ清酒の大杯を傾けた。滿座は陽氣な喧騒で支配されて居た。義仲は主従の心の間に横はる廣い隔りが殆んど吹き飛ばされてしまひ、融然と部下達の歡喜の中に浸り得るのを心快く思つた。

夜は、次第に更け渡つて行つた。

義仲は、可成り過した爲と、連日の疲れとで睡氣がさして來た。

『皆の者。ゆるりと過せよ……。』と言葉を残して座を立ち、巴、山吹の二人に助けられながら、千鳥足で寢室へ向つた。

まどろむ様な幽暗な、又透徹な冷氣が聾々とおしよせて來る闇の世界は、酔つた彼にとつて此上無い安息所であつた。庭の方から、名の知れない床しい花の香が仄かに夜風に漂つて來た。廣間の方から喧騒が微かに響いて來る。管絃の單調な調は陶然と心に辿る事が出来る。

ふと義仲は通つて居る廻廊の片隅に何か黒く蠢いて居る者が、義仲の朦然たる醉眼に寫つた。義仲の今迄酒で散漫に成つた注意が急に凝集された。

怪物!! 人間だ。生憎紙燭も用意して無かつた。

『其方は、何者ぢや。』相手は無言だつた。もどかしい沈黙が続いた。

だが、よく／＼見れば彼の郎従の一人なる事が、其の服装から知れた。酒宴で酔ひ冷風を求めて廻廊に出て、此處に酔ひ倒れて居る事は義仲に容易に想像出来た。醉龍の怪物は御所に率いて行つた郎従の兼安だつた。

人の氣配を感じて郎従は急に何か口の中で物を云ひ始めた。

『喃、兼安』と義仲は妙に打融けた心安さから戯弄つて見たかつた。然し兼安は、相手が主君だと識別し得ない程酔ひ痴れて居た。唯ぶつ／＼と口を動かして居た。そして…

『御主君が…。』『御所…。』『甲冑…。』とか云ふ單語が斷續的に義仲の耳に響いて來た。これは非常に彼の注意を呼起した。義仲の親しみの變はりにそれ等の言葉に對する極度の關心は知らず識らず次の問を發せしめた。

『兼安、そちは何事を申すのぢや…』

兼安の聴覺は酒で痲痺してしまつて居た。こんな言葉は判らう筈がない。唯、一人言の様に。

『御主君も…都の作法を…知つとられりやあ…なあ…。』としどろもどろに嘆息する如く吐き捨てる如く云つて黙つてしまつた。

酔つて全ての感情に鋭敏に成つて居る義仲の心は「はつ」と思つた。同時に憤りが心の奥底からむら／＼と湧き出て來た。自分の弱點に冷淡な鐵槌が大きな打撃を下したからだ。然しその怒恚は單に兼安の酔つて居るとは云へ、その出過ぎた言に對する憤念と云ふよりは、人が自分自身の弱點を發見された時に感ずる淋しい空虚な而も悲痛な怒恚だつた。

義仲は最早其處に永く滯る事を欲しなかつた。直ちに寢室へ滑り込んだ。

錯亂し傷けられて悲しい困惑に充ちた彼は、床に身を横へた。そしてあらゆる形式の傀儡であり皮相的な都の生活に對する憎惡が一時に彼の胸に起つて來た。

「性格破産達の醜い蠕き!! 偉ない努力だ! 煩瑣と冗長を敢へてしてまでも些々たる人爲の中に忙殺しなければならぬ都の間接的な生活は、彼の直接感情に訴へた偽りない然も朴訥な潑刺たる生活と如何に差違の有る事なのだらう。彼等京人の姿態は彼にとつては寧ろ滑稽だつた。優美に名を藉つた都の社交は何んと彼の心身を浪費するのみである事よ!」

『俺は何處までも人間的に生きたい。自己の個性を少しも蔽はない本心からの態度こそ!! これが一番尊いのだ。それからすれば俺の今迄の行爲は當自然である計りで無く善い事ですらあるのだ』と義仲は考へた。

彼のかゝる自己辯護的な自己肯定的な考へは彼に對しては淋しい慰藉であつた。

翌日郎黨の兼安は首を斬られた。

### 三

こんな事があつてから義仲は田舎の生活が無上に戀しく成つて來た。時々都の屋根の間に沈む夕日を見て、あの原始的な自然林を背景とした雄大な而も幽邃な木曾の山々の黝んだ大空に溶け鍵せて行く夕映を、希望に滿ちて眺めた童心の自分の姿が唯懐かしくてならなかつた。義仲の心は此んな感傷的な郷愁の念から進んで鬱々たる氣持を晴らすために毎日酒杯を手にする様になつた。

京の料理には最早彼の味覺を満足さすべき少しの魅力も消え失せてしまつた。彼は故郷の料理を作らせた。それに汁器に至るまで、故郷の其れに形貌らせて作つた。それでも鑒き足らなかつた。部下の者に都の艶な作法を絶対に禁じた。加ふるに京の言葉は頭から嫌つた。木曾辯丸出しであつた。

彼は飽くまでも融和出来ない都の風習に、雄々しくも反抗し出したのだ。そして彼が總てに對して眞摯で又深刻になればなる程重々しい感情が彼に掩ひかぶさつて來た。それと共に彼の心は少しの隙も無い程頑な者と成り勝ちであつた。

京の夏も次第にその暑さを増して來た。

木曾から引き具して來た寵愛の山吹が身の調子が面白く無かつた。義仲は憂鬱に囚はれて、而かも酒で靡爛した自分の心を掻き撈りたい様な氣がした。八月に入つた。或日である。

『只今猫間殿の御見えに成つて御座ります。』と郎黨の根井が義仲の氣色を伺ひながら恐る恐る言上した。

義仲は郎黨の素朴な尙機械的にさへ見える態度が非常に彼に満足氣だつた。

『何、猫が身共に對面しに參つたか、旅先なれば鼠の馳走もないわい』と彼は何氣無く云つた。

郎黨の根井は狼狽おどろた。

『南猫間の中納言殿に渡らせます』

『うむ、猫殿か、通せ』義仲は案外眞面目だつた。根井は危く吹き出す處だつた。

中納言は義仲の居室に案内された。

義仲は健康そうに薄栗色に陽焼けた頬に親しみある微笑を浮べてた。然し眉宇に溢れた精悍の氣、炯々人を刺すの慨ある眼の鋭さ、その颯爽たる英姿に至つては何か犯し難い氣品が覗はれた。

『猫殿か、ようこそ』義仲は禮式を超越した自然の態度だつた。

中納言は飽くまで禮式に適つた婉しとやかな態度で義仲の當惑する程丁寧な挨拶を爲した。

義仲は此の公卿の珍客きんきやくを退屈させてはと純な彼は平常の無口にも拘はらず聞き憎い木曾辯で咄々として陳腐な話題を語つた。

中納言は唯相槌を打つ以外に要件について口を切る機會さへ與へられなかつた。

中納言はこの間、却つて退屈極まるものだつた。そして部屋の器具調度の數奇を通り越して、恐しく荒細工で鄙びた様を、都會人一流の侮蔑の眼睥を以て眺めた。簡素と云ふよりは寧ろ粗暴な總ての樣子に、異様な不安を覺えた。

尙、中納言は、自分の名をさへ正當に呼んで呉れない田舎者義仲との息苦しい對座は非常な不快であり、迷惑であつた。

『猫殿、珍しう食時に御座れば、物よそひ申せ。』と義仲は命じた。義仲はせめてもと思つたからだ。中納言は、はたと當惑した



之れ以上の義仲の款待は彼には苦痛だ。

『いや、御饗應に與つては、却つて恐縮に存じます。』

然し木曾は好意の辭退だと思つた。

臆て、主君の珍客を饗すべく田舎料理が敬々しく家來に依つて運ばれた。

中納言は、自分の前に据ゑられた下人の食べる様な料理を見て決して食慾は起らなかつた。大きな深い田舎合子に山々と盛られた飯、總べて鈍重な色彩をした容器、暗膳する侍の無遠慮な注視、光と色とに洗練された都會人たる中納言は、直ぐ逃げ出しい氣持だつた。

『無鹽の平茸で御座る。冷えない内に、とうぐ。』

と義仲は、いそぐとして汁を薦めた。そして自分は一人甘さうにがつぐと飲み且食つた。

「無鹽の平茸」に中納言は義仲の非常識を危く失笑する處だつた。食ふよりも義仲の野獸の様に食ふ有様を見る方が、面白かつた。

『これは義仲秘藏の精進合子で御座る。汚うは御座らぬ。さあ、さあ』と義仲は忙しく執拗に薦めた。

それにつれて益々中納言の食慾は無く成つて來た。

然し餘りの遠慮は義仲の氣を悪くすると思ひ、無細工な箸を取つて平茸の汁を掻き混ぜた。

『やゝ、殿は小食にておわさるゝな、ははゝゝ猫おろしの眞似をなさるか。ささ掻き給へ掻き給へ。』

と頑固に責めた。

然し先刻から「猫殿」の連發と禮を失した暴言に、すっかり都會人たる自尊心を害された中納言は、「無禮の野人救ひ難し。」とさへ思つた。そして肝心の用件も告げずに忽々の内に別を告げて立ち歸つた。

後には義仲の冷笑が残るのみだつた。

狹隘な天地に蹣跚する彼等京人の卑屈な、同時に心の自由を束拘する態度が義仲の氣に食はなかつた。

## 四

朝日將軍木曾義仲の京に於ける評判は次第に悪く成つて來た。

それは「義仲は、何事も解せぬ野人なり。」と一般に知れ互つた事と、彼の部下達の京に於ける狼藉が次第に募つて來たからだ。

然し彼の部下に對する取締りは從來と少しの變化を見なかつた。寧ろ無干涉であると云つても良い位だつた。

實際誇張の無い赤裸々な自己感情表示の痛快な巨彈を京人に對して放ちつゝある彼!! 彼は戰が唯一の生命なのだ。即飽くまで争闘的であればよいのだ。其の瞬間の彼の腦裡には、最早部下も京人も無かつた。唯盲目的に彼が懷く文化其の物に對する満腔の本質的不平と、生に對する強い愛着が大きい渦卷を爲して旋回して居た。時勢に反抗する事は自己破滅である。時勢に屈する事は、彼にとつて自己偽瞞である。そこに調和を見出す事は彼自身の武士的偏見と彼特有の頑迷が許さなかつた。然し彼は何處までも、前者を取り一切の世の褒貶を冷然と超越する程の勇敢な然も鈍感な生の戰士として猛進して居るのだ。

極端な程度に迄高まりつゝある世の反感!!

『平氣だ!』と美仲は思つた。『俺は世の人々の爲に生きて居るのでは無い。俺自身の爲にこそだ。』

かうした自暴的エゴイスティックな考へは、彼の生活に深く浸潤して來た。

『そして俺自身の爲でなくなつた時は、俺の自身の人格的存在も肉体も何もかも消滅した時なのだ。自分にとつての一時的屈從それはより大なる破壊への前提である。俺の心の叫びに従はない場合には、生きると云ふ本能的要求でさへも犠牲に供し得る覺悟はある。』

そして此の能動的且破壊的分子は次第に今迄の様な無氣力と躊躇とを追出して、彼の渾身に自由な清新な氣を充ち溢れしめ

た。

月の澄む頃と成つた。蟲は盛んに秋を歌つた。

彼の斯様な考へを如何しても屈服せしむべき事が起つた。彼は法皇から又院の御所に御召に與つたのだつた。入京當初とは異り左馬頭たる彼である。

最早最初の参向の時の様に甲冑で行く譯にはゆかない。禮式も必要だ。彼はそこに大きい矛盾を感じた。『だが力で立つて居る俺は武士として絶對權力者の超絶的な力の前に屈從しなければならないのだ。俺自身の社會的榮譽と地位を保證する根柢は朝廷なのだ。』

彼は斯様な姑息的な解釋を附せざるを得なかつた。

義仲は現世に於ける現實と理想との衝突に於て前者に忠實たらざるを得ない世の中に戀々たる一個の俗人否人間だつたのだ。然しそれは本心でなかつた。そして破壊の手は當然そこに彼のこんな精神的苦痛を癒すべき犠牲を見出さなければ止まないだらう。

當日が來た。

滑稽の醜態の連續の後、やつと仕度が出來上つた。然し「裝束冠ぎは袖のかゝり、指貫の輪に至るまで、頑なる事限りなし」の風体だつた。甲冑を身に着けた時の勇壯な英姿には較ぶべくも無く貧弱であつた。

『牛車の用意が出來まして御座います。』と知らせた。牛車は八島殿の物であつた。

木曾は、牛車に生れて始めて乗るのだ。彼はつか／＼と狩衣の鞆になるのも憚らずに、牛車に歪み乗る様は實にあさましかつた。

供には騎馬の郎従と徒歩の雜色數名を引具して居た。

牛飼の次郎丸は日頃縛ぎ飼してあつた逸り牛に、びゅーつと強い一鞭を與へた。牛車は最初からすさまじく走つた。供の人達

は既に牛車と三四町離れてしまつた。

牛車の中の義仲は、その反動を喰つてどうと仰向に打ち倒れた。直ぐ義仲は起きん起きんと手足を腕掻くけれども、着馴れない束装や激しい車の動搖はそれを妨げた。丁度その袖を廣げてばた／＼する様は、蝶の羽を廣げた様だつた。

『やれ、やれ小牛こでいよ。やれ小牛健兒よ。』と義仲は大聲で叫んだ。だが車の軋る音で牛飼には、「やれ、やれ」とのみしか分らなかつた。

牛飼は更に鋭い強い數撃を加へた。牛車は都大路を非常な勢で走つた。行きかふ人々は何事ならんと眼を見張つた。残された徒歩の者共は、小走りに息せき切つて牛車の後を追ひかけて來る。

騎馬の供の一人今井四郎が追ひ附き馬上から

『こりや牛飼、何故か様に仕るぞ。御主君は、いかい御困りぢや』と大聲に喚いた。

牛飼は此の供の恐しい形相を見て懸命で牛車を止めた。車の中では義仲が未だ仰向けにだらしなく倒れて居た。牛飼は非常な事を仕出かしたと思つた。そうして土色に顔色を變へ恐る顔へながら。

『餘りに、御牛の鼻氣の強う御座りまして……。』『其れに御座りまする手形と由す物に取り附き下され。』とやつと起き上つた義仲に手形を指して云つた。

義仲は、丁度溺れて居る人に綱でも投げてやつた時の様に、夢中になつて手形をぐつと掴んで。

『うむ、天晴れ支度ぢや。牛健兒手前の計ひか、殿の計か。』と聞くのであつた。然し彼は不快で不快でたまらなかつた。

やがて牛車は院の御所の門前へ着いた。義仲は落ち着かない氣持ちで轍だらけで臺無しに成つた狩衣に氣も留めず、牛車の後より降りんとした。すると側の京の雜色が周章て、

『車に召される時こそ後より召されますが、下り給ふ時は前よりせらるゝが眞で通座いまする。』と忠義がましく押し留めんとした。

然しくしや／＼した彼は其れを聞き入れる所でなかつた。

『たわけ申すな、車は素通り出来ぬわい。』と凄じい一喝を浴せた。

既に正心を失つた彼は院に於ては數々の失敗を演じた。西の洞院の宿へ歸へつた義仲は不機嫌の絶頂だつた。

牛飼は直ちに斬られてしまつた。

## 五

十月四日京に住る義仲は水島の戰の源氏の敗報を聞き、最早京に留まる事は出来なかつた。早速義仲は事を備へ、京の秋を後にして備中へ下向した。

備中で兵を交へない内に京から桶口次郎兼光からの急報に接し、遽しくも又思ひ出多い京へ向つた。

義仲の京に入つたのは晩秋の十一月二日の事だつた。装ひを凝した京の晩秋の山河は、希望に薄らいだ、失意の義仲等を又心良く迎へた。

京に入つた義仲と彼の部下達は、すつかり荒み切つて京洛を狼藉し盡した。

古書は彼等の行蹟を次の様に傳へて居る。

「家々に入り亂り、門には白旗打立て、家主を追出し、財寶を追捕す。只今食はんとて箸を立つるをも奪取りければ口を空して命生くべき様なし。

道を通る者をも衣裝を剥がれ、手に持ち、脊に荷へる物を押取りければ、やす心無し驚歎などは、云ふ計りなし……云々。」と尙「只人民の煩のみに非ず、賀茂八幡、稻荷、祇園より始めて神社佛閣、權門勢家の御領をも嫌はず青田刈り取つて、株に飼ひ、堂塔、卒都婆など破り取つて、薪となしにけり。狼藉斜ならず、殆んど人倫の所爲とも覺えず、遙かに替劣したる源氏なり、とて沙汰しける……云々。」

(終り)